

図14-4 学業・運動・芸術複合優秀児童の心的機能の発達特徴

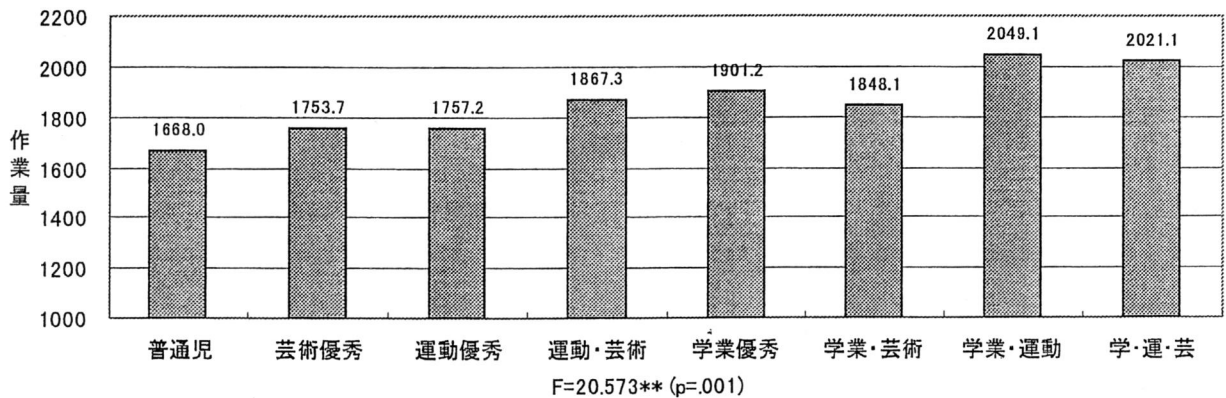


図14-5 優秀者別作業量平均値

芸術優秀児は音美いずれかに10点満点を通した子でありながら、出現率は運動あるいは学業優秀児よりも少なく、10.5%であった。1期11.5人、1クラス平均3.8人の出現数は明らかに少なかった。

教師の評価が学業単独で優秀なり、運動単独、芸術単独で優秀であった児童のUK曲線が図14-2である。学業優秀群の作業量水準が高く、進学プレッシャーのかかる4・5年次以外は休効も他の2群より高い。運動および芸術優秀群の曲線は2年次以後ほぼ同一経過を辿って重なり、両群間に差は認められない。ただし、1年次は学業および芸術優秀群に比べて運動群の作業量水準が低く、休効に差はないもののばらつきが大きかった。運動は秀でているが知的発達に遅れているのであろうか。

優秀性が2項にわたって評価されている子の曲

線比較が図14-3である。2年時以降は(学業+運動)優秀群が群を抜いているのに対して(芸+学)と(芸+運)の2群は曲線が重なりほぼ同一の発達経過を示した。図14-4は(学+運+芸)優秀群とこの3項目に該当しなかった普通の子との比較である。明らかに3項優秀群が高作業量(心的エネルギー水準)、高健康度(休効=後期増加率が高い)を示すとともに意欲的(下降傾向が少ない)で柔軟性(前期弯曲)がある。

図14-4と図14-2、図14-4と図14-3、図14-2と図14-3をそれぞれ重ねて見ると(学+運+芸)≡(学+運)の水準が最も高く、(学のみ)≡(芸+学)≡(運+芸)が次に位置し、その下に(運のみ)≡(芸のみ)、最下位に(普通の子)(一般群)がくる。

図14-2.3.4.を基に各優秀群の出現比率を比較したのが図14-5である。この図は優秀児の作業量

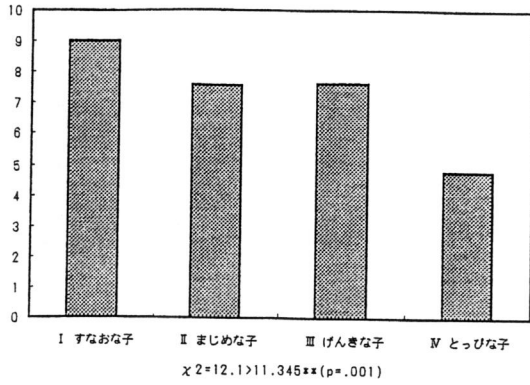


図14-6 複数項目優秀児類似人柄群別分布：%

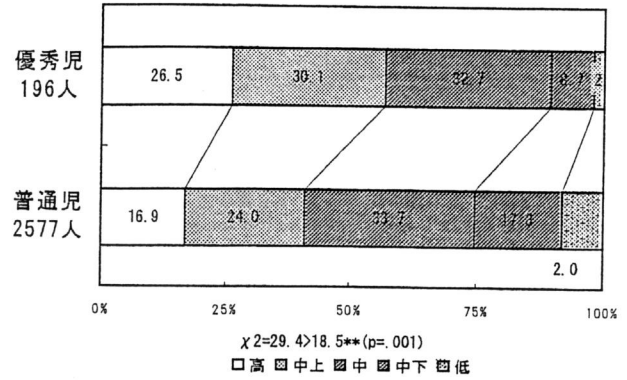


図14-7 優秀児と普通児の健康度出現率：%

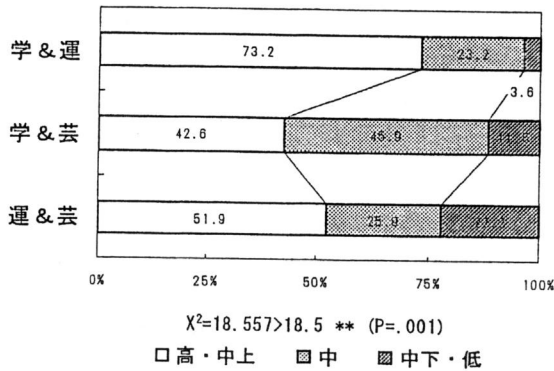


図14-8 2項目優秀者の健康度出現率：%

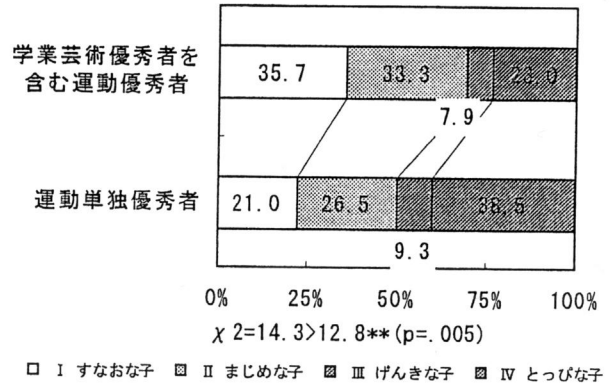


図14-9 運動優秀者の類似人柄群別分布：%

平均値であり、群間差が認められた。加算作業は知的活動であるから学業優秀群が一般群より上位にくるのは当然としても、学業に加えて運動も優秀の要素が加わると最も高い水準に達する。さらに、学・運・芸いずれであっても秀でていれば、一般児よりも高い健康水準と心的エネルギー水準を示す点は再認識する必要がある。

図14-6は学業、運動、芸術が同時に優秀であると判定された学業+運動+芸術優秀児童を初めとして、学業+運動、学業+芸術、運動+芸術の複数項目に対する優秀者を合計した類似人柄群別出現比を示している。出現比率に差が認められ、とくに人柄I群あるいはIV群と他群の優秀児全体の出現率に差が認められた。複数項目優秀者に関しては適応のよいI群は優秀児が多く、独自性の強いIV群では逆に少なかった。

図14-7は上述の優秀者と普通児の精神健康度を比較している。学業、運動、芸術の優秀者のうち2項目以上に優秀と判定される優秀者の精神健康度は明らかに高く、健康度中上以上が過半数を

占め、中下+低度は1割強であった。

また、2項目優秀群間にも差が認められる。図14-8は学業+運動、学業+芸術、運動+芸術優秀者の2項目優秀者の健康度分布を示している。3群間には学運>運芸≒学芸の関係が認められ、学業に加えて運動優秀者の健康度水準の高さを窺い知ることができる。

好きな教科として体育を選考する比率が知的優秀者に低いことが知られているが、運動と知能は無関係であろうか。杉原等(杉原、1971)は星型鏡映描写運動課題を基に運動学習に知能の影響が大きいこと、とくに学習初期よりも学習が進む段階で徐々に重要性を増すことを示している。学業が優秀であることは必ずしも知能の高さを示すものではないが、学業に合わせて運動が優秀とされる児童に健康度の高いものが多く存在することは、児童期における運動の重要性を示すものであろう。

図14-9は運動優秀者について運動のみ優秀な運動単独優秀児と学業や芸術教科でも優秀性を示す児童の人柄群を比較している。運動単独優秀者

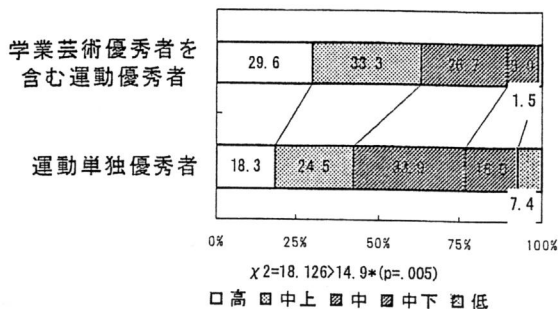


図14-10 運動優秀者の健康度出現率：％

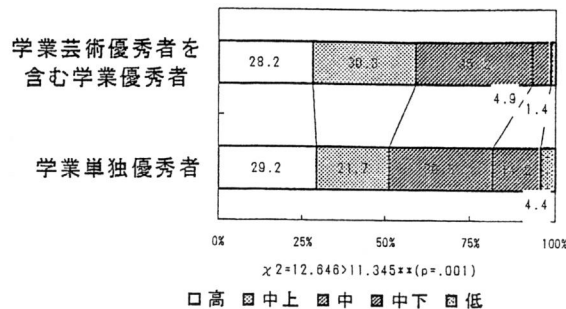


図14-11 学業優秀者の健康度出現率：％

よりも学業や芸術も合わせた優秀群は適応のよいI群であり、逆に個性派IV群は運動のみ秀でているものが多いことがわかる。

図14-10は運動優秀者の精神健康度の分布である。ここでも運動が優秀であるだけでなく学業や芸術も優秀である運動群が、精神健康度においてより高いものが多く、低いものが少ないことが理解できる。

同様に学業優秀者について学業のみ優秀な学業単独優秀児と運動、芸術でも優秀性を示す児童の人柄、健康度分布を比較した。人柄群間に差は認められなかったものの、健康度水準に差がみられた(図14-11)。中下+低度群の出現率が学業単独優秀者よりも運動や芸術も得意な学業優秀者の方が低いことを示している。

最後に芸術優秀児の人柄と健康度を比較した。芸術優秀者とその他の優秀者を併せた芸術優秀者間に明白な差異は認められなかった。

iv 附属中学校進学児と附属中学校外進学児

本対象小学校は附属小学校3校の中では設立が最も遅いと同時に、最も早い小学校に対して女子中心の師範教育を行った戦前の歴史を受け継いできた。現在では今一つの小学校を合わせた3校とも進学教育に力を入れているが、対象校の場合は、とくに小学校から中学校・高等学校へ進学する度に、定員枠の3分の1を附属外から受け入れている。その際、必然的に成績優秀者が入学するため、附属高校卒業生は附属小学校在籍者の3分の1に減少する実態がある。したがって、進学に対する保護者の関心は強く、小学校時から知的学習推進の必然として塾へ通わせ、児童への負担過重が問

題となる話も多い。

さらに対象校における教育の特徴の一つに、5年生になるとクラス担任制から教科担任制へと変更する点がある。データを収録し始めた1970年代に、5年生の児童が過緊張、意欲減退、情緒不安定の徴候を多出していたので、クラス担任との面談では時間をかけて話し合った。それ以来、不健康徴候が見られるのは、進学問題と合わせて児童の適応能力が影響しているのではないかと考えてきた。

進学の可否は5年次末の成績評価の比重が大きい。5年生の始業当初に教科担任制が親の目に映ると、進学のボーダーラインにある子に塾通いが課せられて、勉強漬けが日常化する。UK検査の実施は6月下旬から7月上旬が多く、この頃に児童の心理状態が4年次までの伸びのびとした姿とは打って変わることになる。その結果を進学進路別に附中進学者と附中外進学者に分けて全体と比較した曲線が図15-1である。

i) 類似人柄群と精神健康度との比較

全2735名中、附中進学者1700名(61.2%)よりも附中外進学者1035名(37.8%)の方が、1/3比率(33.3%)よりも多い。附中外進学者の中には私立のレベルの高い進学校へ進む例もあるが、多くは公立中学校へ進む。

精神健康度分布(図15-2)をみると、附中進学者の高度+中上度者が46.9%と多いのに対して、附中外進学者の中下度+低度者が33.3%に達し、明らかに交互作用が認められる。

人柄群別分布(図15-3)から、附中外進学者と比較すると、附中進学者に適応の良い素直なI群が多く個性派IV群の少ないことが明らかであった。